

られるものでなく、日常生活に科学的な諸経験を實際に活用出来るよう、家庭の協力も同時に望むべきであつて、この協力がなければ科学技術教育において男女の差が出来やすい。また社会生活環境にも影響される。

科学技術教育は頭の働きのすなわち手の働きとなるよう体育のことも忘れてはならない。知的発達と同時に運動神経も十分発達するよう、常に音感とリズム感と共に体の調整を考えなければならぬ。以上のことを考へて保育した結果、短い経験ではあるが、幼稚園での仕事に対して興味を持たなかつた子どもが、道具を自由に使用製作することによつて仕事に興味をもち、種々な材料を使って製作すると同時に種々な道具類の修理も進んでするようになった。また女児も男児と共に道具をよるこんで使うようになり平面的な製作から立体的なものを楽しんで作るようになった。また運動神経の発達と体育の為に、音感やリズム感も考へて指導した結果、今までに見出せなかつた幼児の個性が非常にはつきりして個性教育にもたいへん役立つ良い結果であつたと思う。

胎教の自然科学的基礎 についての検討

近江学園

田中昌人

教育思想史的にみると胎教の概念はそれ自体が転換期を迎えているのであるが、それを考察する一契機として自然科学的検討の問題をとりあげ、問題の所在と問題展開の方向を示したい。

一、妊娠時の外因が産児の発達にいかなる効果を及ぼすかという問題をとりあげたものには精神分析学・精神身体医学・発達心理学・小児科学・実験発生学の知見があるが、それらを検討することにより、問題は胎生期条件変化の発達効果性という問題領域のものとして、原因の実験発達心理学の立場から、発達過程の観点のもとにとりあげられていかねばならないということが指摘できる。

二、しかもこの場合の外因は機能異常の生成といつた彷徨変異の由来を明らかにしようとするのであるが、その場合にも器質的欠陥がその根底に把握されやすいものから取上げられねばならないのであつて、現段階における精神分析学精神身体医学的アプローチには方法的限界が認められる。現在必要性と実施可能性が高く、しかも結果によつては従来の見解に新しい意味を与えるのではないかとみられる研究課題は、妊娠初期にウィールス性疾患に罹患した妊婦より生れたものの知的発達様相を新しい発達の知能観から把握し、同胞との発達過程的段階差から二重比較的にみていく研究である。

三、なお、残統効果の判定は発達過程的になされていかねばならないが、その際の心理構造は発達障害における極性化過程の検討としてとりだされる局面からみていかねばならない。測定結果及び過程の内容分析、心理機能培養法の併用が要請される所以である。

以上、問題展開の方向を示す努力をしたがこれを勇気づけてくれるのは細菌のみならず鳥類において得られた定向変異形成の資料である。